

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

74

二人の両腕をいっぺいに伸ばしやうと手が繋がると、かなりの大きな木であった。今までみたこともない木である。住田町立上有住小学校五年生の時、初めて五葉山麓に分け入って見た木々に圧倒された。

一九九五年六月二十五日の日曜日。その日は好天に恵まれていた。上有住小学校の校庭には、私たち五、六年生と父兄、森を案内していただく大船渡営林署の先生方、住田町役場林政課の皆さん、それに小学校の先生方の合わせて百三十一人が集まっていた。「五葉山の自然に触れ、郷土の自然を愛する心を高めよう」と初めて実施された「自然観察会」焼き肉のつどい。「ブナ苗木の記念植樹」にみんなワクワクしていた。

学校での結団式の後、四台のマイクロバスで五葉山麓にある五葉山森林浴道へと向かった。約四十分で到着。学校を朝八時に出発し、午後三時に学校で解散式を行う全行程七時間の上有住森林愛護少年団自然観察会は始まった。

森のにおい、空気、小鳥のさえずり、沢の音、青々とした木々の葉の音。初めて触れる森の姿に驚きと新鮮さを感じていた。どのくらい歩いたのだろうか。突然目の前に

大きな巨木を持った木が現れた。その木はブナであるという。森林インストラクターのおじさんが「人間で言えば、悪性の腫瘍が転移したようなものだ」と言ったことを今も覚えている。

子どもである。燦々と降り注ぐ太陽が父ならば、ブナはその光を体いっぱい浴びて育つ子どもである。

父と母の愛情、励ましを受けた子どもは、小さく目立たない芽を膨らませながら、少しずつ伸びていく。やがて四方八方に枝を広げ、人々を魅了するブナになる。ブナの存在が大きければ大きいほど、自分の存在の小さ

標を授けられていた。自然観察会は私にとって「心の財産」でもある。【執筆者フロブイール】一九八四年生まれ。住田町上有住出身、九戸村戸田在住。九戸村立九戸中学校講師。

「心の財産」——自然観察会

九戸村戸田 佐藤 大 樹

らないが、この木が自分の命を守るためにこぶをつくったのだろう。その営みに「痛み」や「辛さ」を感じ、命あるものの仲間としてこのこぶを持つたブナの木に同情している自分をみていた。このこぶを持ったブナのほかに、五葉山麓の森にひととき大きくドッシリ構えているブナを目にする

さを知ることとなった。「自分の人生は自分の力で切り開く」「力のないのは自分のせいだからしょうがない」という考えを持つている人も多いと思うがそうだろうか。あの森はそうした捉え方に対して明確な「答え」を用意している。動物も植物もお互いの力を借りながら生きている存在で

あふれる。燦々と降り注ぐ太陽が父ならば、ブナはその光を体いっぱい浴びて育つ子どもである。



ニレー
エッセイ